

卒業式に見る袴の現代的着装の研究 IV-色彩の視点から-

A study of wearing modern hakama at graduation ceremony IV
-From color viewpoint-

瀬川 かおり、大塚 絵美子、太田 裕子、長谷川 紗織
Kaori SEGAWA, Emiko OTSUKA, Yuko OTA, Saori HASEGAWA

女子学生の袴の着装の歴史は明治時代からと古く、従来の着物による通学ではなく、袴の着用が徐々に浸透していった¹⁾。その後、洋服が一般的となり、現在に至る。一方、大学卒業式では、近年、女子学生の袴の着装が主流となっている。田中ら²⁾は新聞記事の分析から、1990年以降から現在にわたり袴着装は定着していることを明らかにした。被服学科の卒業式における女子学生の袴着装の実態を調査したところ、毎年9割以上の袴の着装率であることから明白である³⁾。このように、女子学生にとって卒業式で袴姿を選択することが定着している。

袴着装に関する研究はいくつからみられるが、それらの多くは、伝統的な側面からの考察がなされている。我々はこれまで、現代における女子学生の袴着装に関心を持ち、研究を行ってきた³⁻⁶⁾。その結果、女子学生にとっての袴着装は、伝統的な概念にはとらわれず、日頃の装いの好みと合致する選択がされていることなどが明らかになった。このように、女子学生にとって袴は伝統的な着装というより、むしろ日常のファッションの一端として捉えているのではないかと考えている。最近では、「袴の機能性研究-世界に発信する“HAKAMA is cool”-」が科学研究費助成事業の助成を獲得した⁷⁾。この研究では、日本発のクールな^{注1)}ファッションとして広く世界に知らしめることを目指とし、袴の機

能面や快適性の研究などが行われている。日本の伝統的な衣装の袴は、世界にファッションとして広がりを見せつつあるといえよう。

女子学生を対象としてアンケート調査を行ったところ、「袴の装いについて重要なこと」の設問では、着物の色が最も重要で、続いて、全体の雰囲気や着物柄、袴の色の順となった。このように、袴の装いには、着物の選択が優先で特に色について重要であることが導き出された^{5,6)}。「きもの歳時記」⁸⁾の一節では、「(前略)三月も半ばをすぎると、街角に袴姿の学生が見受けられる。卒業式に向かう女子大生である。たいていは色無地紋付に紺の袴姿で、(後略)」とある。書籍発行時期から推測すると、この様子は卒業式での袴着装が浸透し始めた時期に相当し、当初は袴に合わせる着物は色無地であったことが伺える。一方、近年卒業式で見かける袴姿やカタログなどでは華やかな色柄の着物姿を多く見かける。このように、袴着装の様相も時代とともに変化していることが推測される。本稿では、女子学生の袴の色に関する2年間のデータをまとめ、現在の袴着装の特徴を明確にすることを目的とした。

袴レンタルを行っている業者（以下、レンタル業者）に、女子学生が袴を選ぶ際に述べているキーワードについて数回にわたりヒヤリング調査をした結果、着物や袴の色の要望以外では、「かわいい」、「レトロ」、「大人っぽい」といったイメージの要望が多かったことがわかった。また、

袴着装のカタログは、レンタル販売を誘導するための重要なツールである。そこで、女子学生とカタログのデータを収集し、それらの結果と色のイメージとの関係について考察する。

2. 研究方法

色の調査対象は、前々稿で対象とした 2015 年 3 月、前稿で対象とした 2016 年 3 月に卒業する学生に対するカタログ⁹⁻¹³⁾、および学生の袴着装である。2015 年では、レンタル用カタログ「はかま」⁹⁾ (被写体数 52 体)、「卒業時装」¹⁰⁾ (被写体数 42 体)、同年 3 月に卒業した本学被服学科の学生 92 名の卒業式での袴の着装を撮影した共通資料^{注 2)} である。2016 年では、レンタル用カタログ「はかま」¹¹⁾ (被写体数 52 体)、「卒業時装」¹²⁾ (被写体数 36 体)、「卒業袴」¹³⁾ (被写体数 82 体) 同年 3 月に卒業した本学被服学科の学生 90 名の卒業式での袴の着装を撮影した共通資料^{注 2)} である。

色の判定は、着物生地、着物柄、袴生地、袴柄の 4 つの部位で行った。各判定部位において、日本色研配色体系(日本色彩研究所による PCCS ハーモニックカラー 201、以下: PCCS 配色カード) (図 1(1)色相、(2)トーン) を照らし合わせ、カタログの色にもっとも近い配色カード

を選択した。各判定部位の色の判定は、それぞれ占める面積の大きさの順に 3 色まで行った。その他の判定方法は、前々稿⁵⁾で詳細に述べている。

3. 研究結果

前々稿および前稿では、各レンタル業者のカタログの特徴を個別にみてきたが、その違いに着目するよりも共通性を捉えたいため、本稿では、各カタログの結果をまとめて分析を行った。

まず、各被写体、各部位で何色の種類の色が用いられているかの色数の集計を行った(図 2)。つまり、色評価方法から、各部位で面積の大きさの順に最大 3 色までの判定となる。“なし”(着物柄、袴柄のみ)から 3 色までの色数について、出現数を割合で表した。カタログ、学生に共通している特徴としては、着物柄は 3 色が多い点、袴生地では 2 色までが多い点が挙げられる。カタログと学生の相違点としては、着物生地では学生の色数が多く、3 色の割合が高くみられた。袴柄ではカタログの色数が多かった。以上の結果から、カタログ、学生ともに高い割合で 2 色以上の色数が用いられる傾向がみられ、特に、着物柄の色数が多いことがわかった。また、カタログと学生で異なる傾向もみられた。



図 1 (a)PCCS 色相環

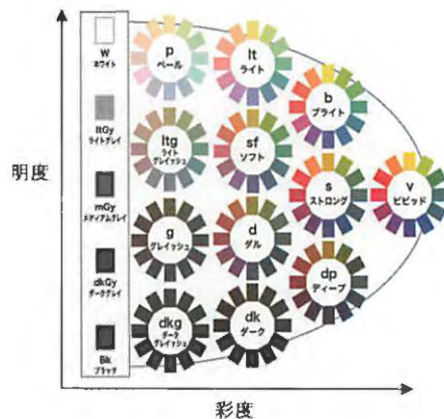


図 1 (b)PCCS トーン

以下、各部位の代表色（面積が最大の色）^{5.6)} についての分析を行った。まず、代表色の色の種類を明確にするため、色の種類数の総数をまとめた（図3）。なお、色の種類は最大で203色（PCCS配色カード201色+金、銀）である。結果から、着物生地、着物柄では30色以上の種類がみられた。2016年のカタログでは40色以

上となっている。これは被写体数が増加したことで色のバリエーションが増えたためと予想される。袴柄は他の判定部位に比べて種類数が少なかった。これは、一般的に袴柄は小さく描かれるため、柄の模様や色の種類が少ないためと予想される。

次に、各部位の代表色の特徴を捉えるため、

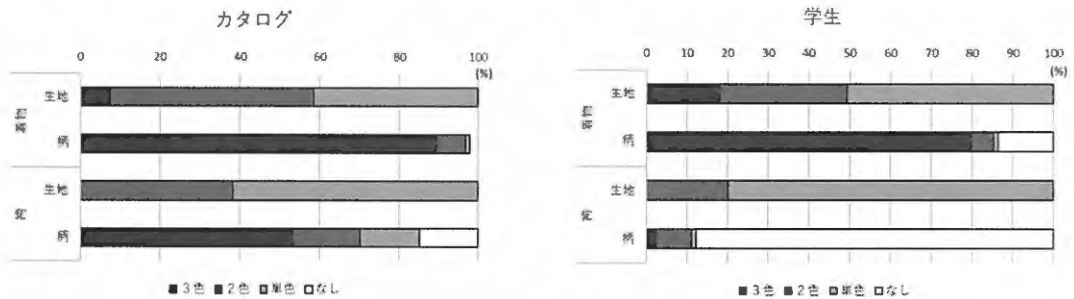


図2 色数の集計結果 (a)2015年

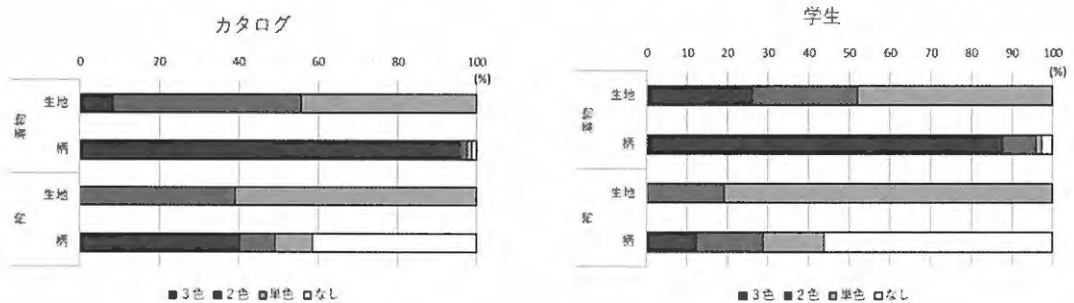


図2 色数の集計結果 (b)2016年

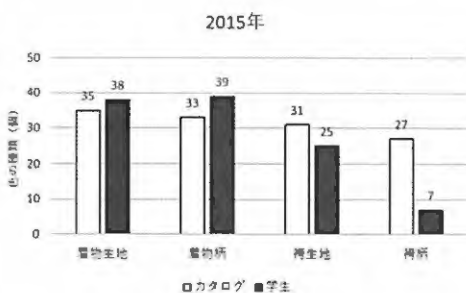


図3 色の種類数 (a)2015年

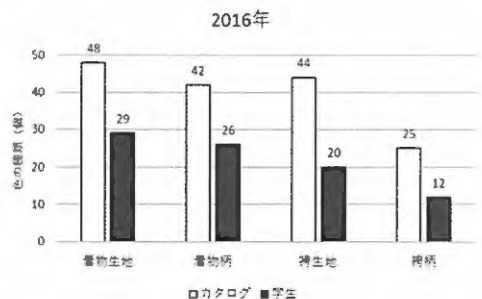


図3 色の種類数 (b)2016年

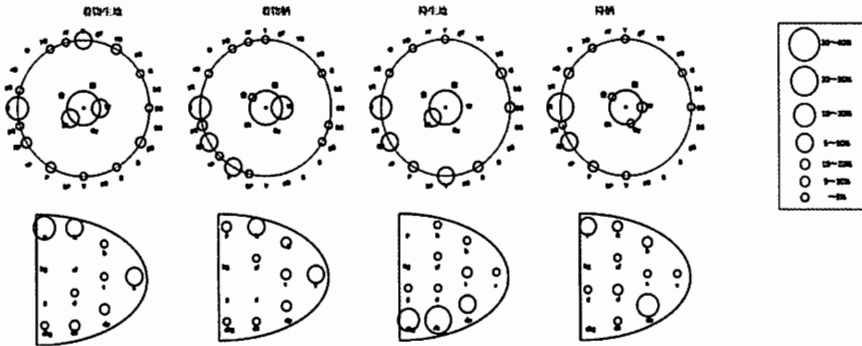


図4 代表色応答割合(a)2015年 (1)カタログ

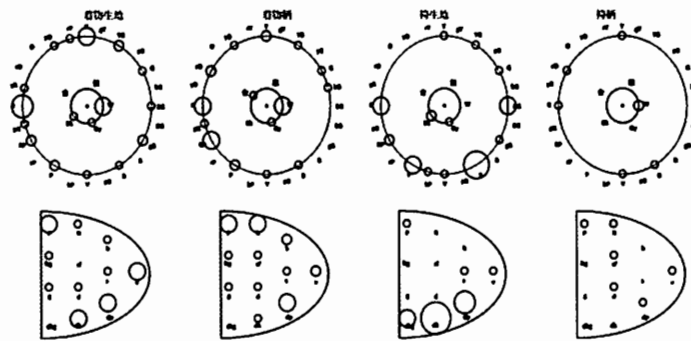


図4 代表色応答割合(a)2015年 (2)学生

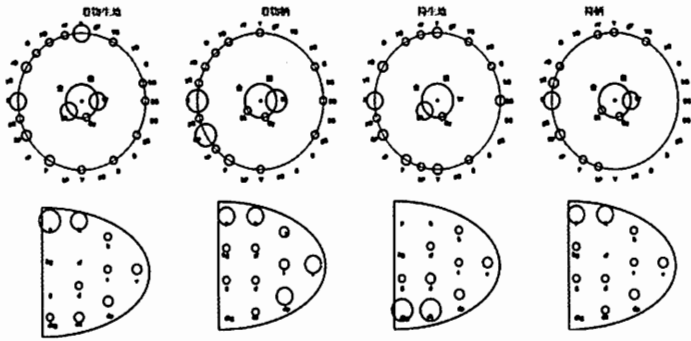


図4 代表色応答割合(b)2015年 (1)カタログ

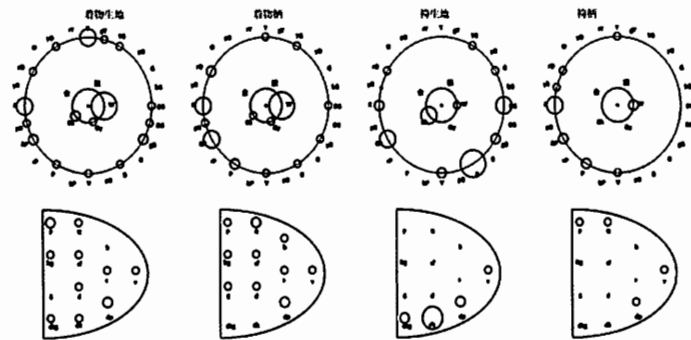


図4 代表色応答割合(b)2015年 (2)学生

色相環図とトーン図に出現率をシンボルの大き
 さで表現した(図4(a) 2015年(1)カタログ、
 (2)学生)、(図4(b) 2016年(1)カタログ、(2)
 学生)。色相環に含まれない色(白、灰、黒、金、
 銀)は、色相環の内側に表記した。シンボルの
 大きさが大きいほど代表色の出現率が高いこと
 を示す。全体的傾向として、着物生地では、赤、
 暖色系、白が多く、p、vが多かった。着物柄で
 も生地同様、赤、暖色系、白が多かった。袴生
 地では青、紫系が多く、dk、dkgなどの低明度
 のトーンの割合が高かった。袴柄では赤、紫系
 が多くみられた。

年による違いとしては、カタログでは顕著な
 違いはみられなかったが、2016年で着物柄のト
 ーンの種類、袴生地の色相の種類が増える傾向
 がみられた。学生では、2016年で着物生地の赤
 が減少し、白、黒が増えた。その他の判定部位
 でも、白、黒が増加する傾向がみられた。ト
 ーンでは2015年では大きなシンボルがみられ
 たが、2016年になるとシンボルのサイズが減少
 している。また、袴生地のトーンでは2015年
 ではdkが多かったのに対し、2016年ではその特
 徴が減少し、様々なトーンが出現した。このよ
 うに、学生では2016年になると際立った特徴が
 減少したといえる。カタログと学生の違いとし
 ては、学生の袴生地では青系が顕著に多い点があ
 げられる。

次に、着物と袴の色の組合せについての分析
 を行うため、各被写体の着物生地と袴生地をペ
 アデータとし、色相とトーンにおける組合せの
 出現数を求めた(図5(a) 2015年、(b) 2016
 年)。たとえば、ある被写体の着物生地がb10
 で袴生地がdkg2の場合、色相が10と2、ト
 ーンがbとdkgとなる。結果は、組合せの出現
 数を被写体数に対する割合で表した。出現割合
 の多さは矢印の太さで表現しており、太い矢印
 ほど出現率が高いことを示す。また、色の組合
 せが2回以上出現したものを対象に表記しており、
 1回のみの出現の結果は含まれていない。矢印
 の始点が着物、終点が袴の色を表す。結果から、

2015年のカタログでは赤の着物に黄、緑、青、
 紫を合わせるものが多く、トーンではpの着物
 にdkの袴を合わせているものが多かった。2016
 年になると、黄の着物に赤、赤紫、緑の袴を合
 わせる傾向がみられた。トーンでは2015年の特
 徴に加えて、pの着物にvの袴、vの着物にdk
 の袴という組合せなどもみられた。2015年の学
 生では赤や赤紫の着物に青の袴、白の着物に赤
 や青、青緑の袴などが多くみられた。トーンで
 はpの着物にdkの袴を主に、vの着物にdk、
 dkgの袴の組み合わせなどがみられた。2016年
 も同様の傾向がみられた。この結果から、カ
 タログでは色相、トーンともに年による傾向の相
 違がみられた。しかし、高明度トーンの着物に
 低明度トーンの袴の組合せという点では共通し
 ている。学生では、色相では赤の着物生地に青
 系の袴の組合せ、白の着物生地には、青、赤、
 紫の袴生地の組合せがみられた。トーンではp
 の着物にdkの袴を主に、高明度トーンの着物
 に低明度トーンの袴の組合せが多いことがわか
 った。

次に、基本色名による解析を行った。これま
 でのデータは、PCCS配色カードの特徴を生か
 し、トーンと色相に着目してきた。一方で、学
 生の袴選択時に「ピンクのかわいい着物」など、
 “色名”による表現というものが多くみられるこ
 が多い¹⁴⁾。これまでの色相の情報だけでは、
 その色の色名はわからない。例えば、ピンクは
 色相では赤系となる。そこで、基本色彩語であ
 るBerlin&Keyの11基本色名¹⁵⁾(白、黒、赤、
 緑、黄、青、オレンジ、紫、ピンク、茶、灰)
 に着目した。この11基本色名は、言語学的だけ
 でなく、人間の色覚特性としても重要性が証明
 されており、日常で最もよく用いられる色名と
 されている¹⁶⁾¹⁸⁾。各被写体の代表色について、
 PCCS配色カードの色から基本色名11色に変換
 を行い¹⁹⁾、出現数を割合で表した(図6(a) 2015
 年(1)カタログ、(2)学生)、(図6(b) 2016年(1)
 カタログ、(2)学生)。以下、色の表記をPCCS
 配色カードの色相と基本色名で区別するため、

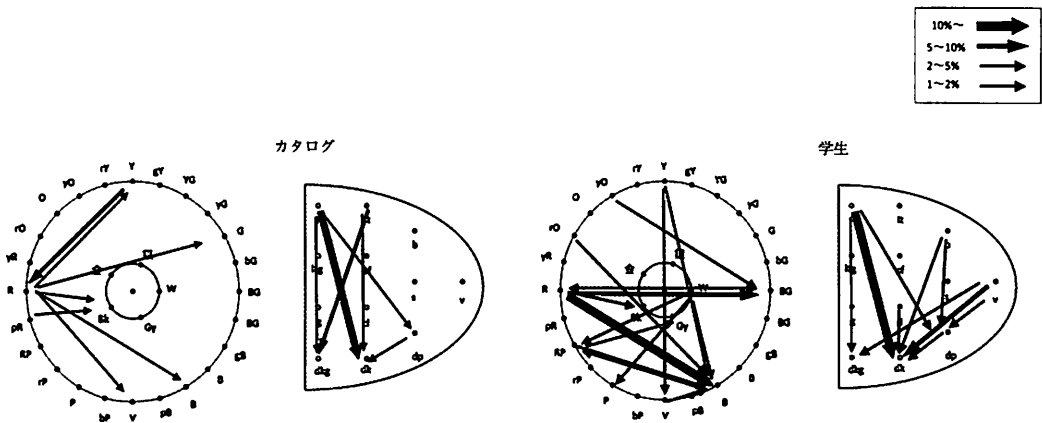


図5 着物と袴の色の組合せ (a)2015 年

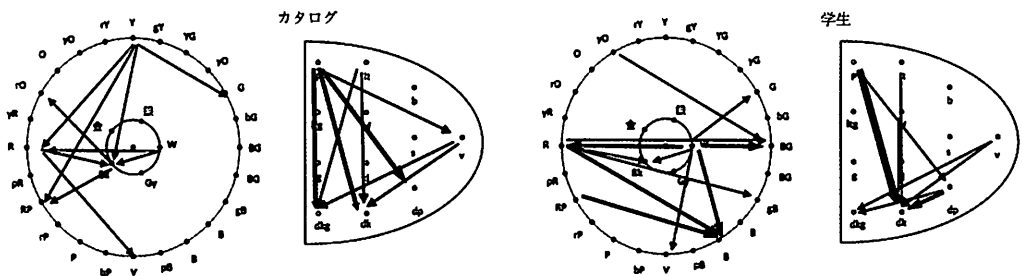


図5 着物と袴の色の組合せ (b)2016 年

共通する色名は、基本色名の方に“～色”と表記する。結果から、カタログの着物生地は、赤色、黄色、白色が多い傾向が示された。一方で、学生では、赤色、白色、ピンクが多いことがわかった。着物柄については、カタログ、学生ともに白色、赤色、ピンクが上位を占めた。図4の着物柄の色相では白の他、赤系、紫系、トーンでは高明度のトーンが多いことが示されたが、図6から、赤系が多いのは赤色だけでなく、ピンクも含まれていることが示された。袴生地ではカタログと学生で、赤色、黒色、緑色、紫色が多かった。また茶もみられ、これは図4で多

くみられた黄系は黄色ではなく、茶であることを示している。袴柄ではピンク、赤色、白色が多かった。これらの結果から、カタログ、学生ともに、着物生地では赤色、白色がもっとも多く、着物柄では、赤色、ピンク、白色が多いことがわかった。袴生地では、その他の判定部位にはみられない、緑色、青色、紫色、茶なども多くみられた。袴柄は、着物柄と同様の傾向であった。

卒業式に見る袴の現代的着装の研究 IV-色彩の視点から-

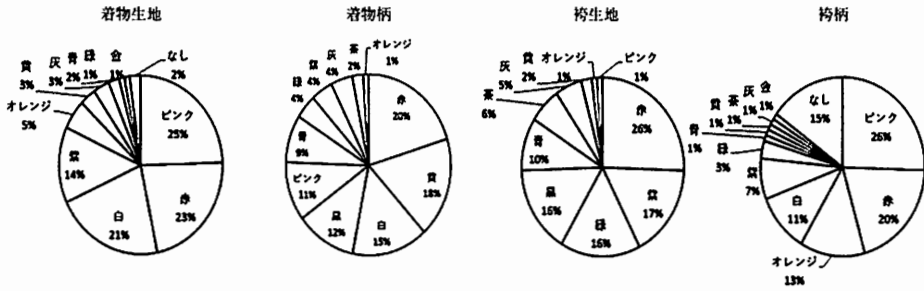


図6 基本色名応答割合(a)2015年 (1)カタログ

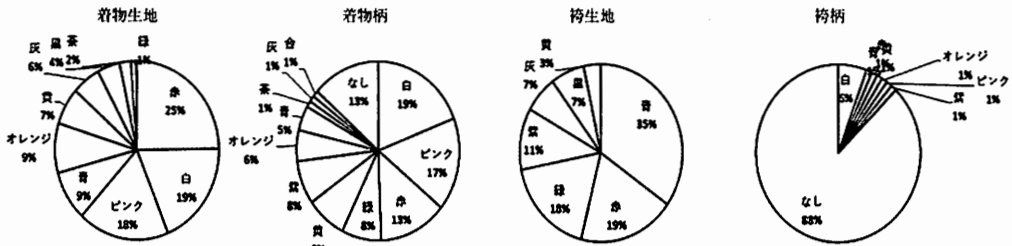


図6 基本色名応答割合(a)2015年 (2)学生

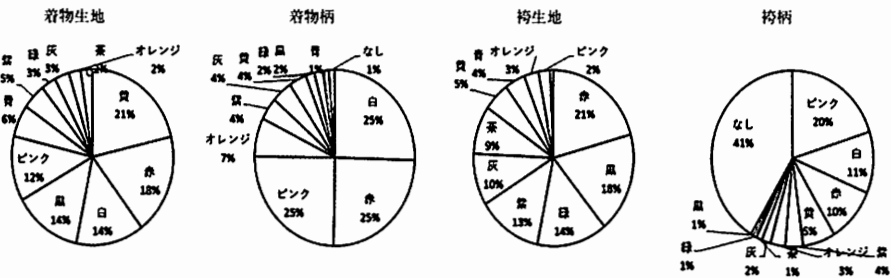


図6 基本色名応答割合(b)2015年 (1)カタログ

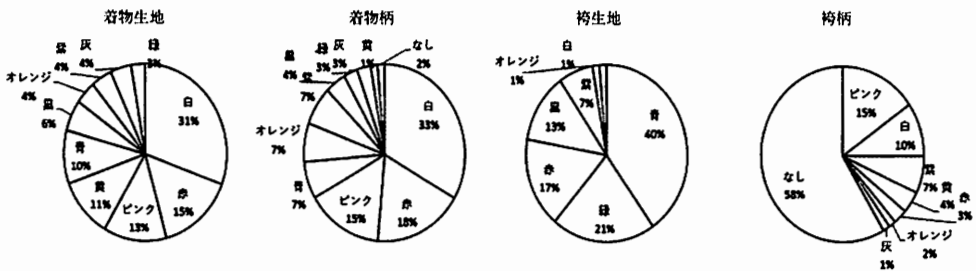


図6 基本色名応答割合(b)2015年 (2)学生

4. 考察とまとめ

2015年、2016年の色のデータから得られた特徴を、色数、各部位の代表色、着物と袴の代表色の組合せの観点から考察する。

色数の結果から、カタログ、学生ともに着物生地は1～3色と様々な色数のものがみられた。特に、学生で3色の割合が高かった。単色の着物生地は儀式的なイメージがある。一方で、多くの学生が、着物生地に複数の色を用いた、華やかな印象を与える着物を選択する傾向がみられたといえる。カタログ、学生ともに袴柄より着物柄の色数が多かった。カタログと学生で異なる点としては、学生の袴柄の色数が少なかった点が挙げられる。このことは、カタログでは華やかな着物、袴で豪華に紙面を飾ろうとしていると推測される。一方、学生では袴柄は少なめの色数で控えめな印象を与え、着物を引き立てようとしているのかもしれない。その他、学生のデータは印刷紙へのカラーコピーのため、カタログに比べて画質の劣化がみられ、小さい柄の色判定ができないというアーチファクトの影響もわずかながら生じた可能性も考えられる。

2年間の結果から得られた各判定部位の代表色の特徴として、着物生地ではカタログ、学生で共通した傾向としては、色相では赤、白、トーンではp、lt、v、基本色名では赤色、白色、ピンクが多かった。着物生地の色は赤がもっとも人気であるという報告もあり²⁰⁾、今回の結果と一致していた。色のイメージから捉えると、赤の“情熱的な”派手な”イメージ、ピンクの“かわいい”イメージ、白の“清楚な”イメージ^{21,22)}が女子学生に多く好まれたといえる。また、カタログでは白の他、黒が多くみられた。学生でも2016年には黒の割合は上昇している。白や黒は普段着で好まれる色であり²⁰⁾、この傾向は、袴着装に関する色の選択は普段着と同じように捉える可能性を裏付けている。また、学生のアンケート結果から、黒の着物は“カッコいい”イメージを与えることが報告されている¹⁴⁾。黒の着物は、

喪服や留袖など儀礼的な場面でよくみかける。女子学生には、そのような黒の着物を“カッコいい”イメージと捉え、卒業式で多く選ばれているといえる。

着物生地のカタログと学生の違いとしては、学生ではdkやdpといった低明度のトーンの割合が高かった点である。これは、dp2と白の矢絰の着物が多かったことが要因の1つである⁵⁶⁾。これは、矢絰は明治や大正時代における女学生の袴姿に好まれるレトロなイメージの着物である²⁴⁾。また、赤だけでなく、他の色相でもこれらのトーンは多くみられた。dpトーンは、“伝統的な”“和風の”といったイメージを有し²⁵⁾、“レトロな”イメージのトーンであり、色でレトロな印象を表現していることが示唆された。2年間での着物生地の色の変化に着目すると、カタログではほぼ同様の傾向であった。一方、学生では、2015年に多くみられた赤系、p、vトーンの割合は、2016年ではその傾向が弱まり、選択されたトーンの種類が増加した。このように、学生では選択する色の多様化がみられたといえる。

袴生地は、カタログ、学生ともに様々な色相がみられ、その他の判定部位では上位にはみられない緑色、青色、紫色、茶色などもあった。また、トーンでは低明度のトーンが多く、どのような色相でも落ち着ついた印象を与える。着物柄、袴柄では、カタログと学生ともに、基本色名では、赤色、白色、ピンクが多かった。これは、着物や袴の模様には花柄があらわれていることが多く、花の色で女性らしさやかわいらしさを表現していることが伺えた。

着物と袴の代表色の組合せでは、カタログ、学生で共通して高明度トーンと低明度トーンの組合せが多い点で一致していた。この組み合わせは、色彩感覚の側面から、着物が軽い印象の色、袴が重い印象の色²⁶⁾であり、重力と一致しているため、見た目の安定感が得られる。さらに、色の認識の側面から、明度差は対象の視認性を高めるため²⁶⁾、着物と袴の形状をくっきり

と映し出す効果もある。色相では、学生では着物生地に赤が多く、袴生地に青が多く、その組合せが最も多かった。赤と同様に着物生地で多かった白は、袴生地は青の他、紫、赤紫、赤の組合せも多くみられた。これは、白い着物生地には様々な袴生地の色を合わせやすく、好みの袴生地の色を選択していたことが推測される。

以上、2015 年、2016 年の結果をまとめると、着物、袴には 2、3 色の色数がある場合が多いこと、着物生地では赤、白、ピンク、高明度、高彩度トーン、袴生地では低明度トーン、着物柄と袴柄には赤、白、ピンクが多いことがわかった。また、着物生地では、学生では低明度のトーンも人気であった。これは、“レトロ”の流行の表れであるといえる。さらに、学生では年による違いとして色選択の多様化がみられた。このように、女子学生の着物や袴の色の選択には、使用頻度の高い色やトーンが存在することがわかった。また、その特徴には流行が影響していることや色選択の多様化がみられ、今後の調査結果は、傾向の変化が予想される。

調査で対象となった学生は、本大学被服学科に所属する学生に限定されており、今回得られた傾向が女子大生全般の特徴を表しているかは明確でないが、同対象を継続的に調査することで、年代による変化を抽出しやすいという利点が挙げられる。一方、カタログでは、2 年間での色の特徴に大きな変化が見られなかった。カタログは消費者に提案色を提示する役割があるため、年毎の色の变化は少ないことが予想される。しかし、着物と袴の色の組合せとしては大きな違いがみられた。このことは、レンタル業者は代表的な色を提案しつつ、各年で着物と袴の配色に変化を付け、新たなイメージを表現しているのかもしれない。

今後も学生とカタログの色分析の継続的な調査を行い、ファッションの流行との関連性について明確にしていきたい。また、着物柄や袴柄の形状や大きさが、袴着装のイメージに及ぼす影響も踏まえ、袴着装のイメージとの関連性も

明らかにしていきたい。

注

注 1) 日本政府の国策である、日本の文化や伝統を産業化し国際展開する取り組み“クールジャパン”政策の“クール”を指す。

注 2) 2015 年、2016 年に行われた共立女子大学の卒業式当日に被服学科学生 92 名の袴の着姿を撮影した。撮影箇所は 1 全身正面、2 全身背面、3 全身右側面、4 上半身、5 衿元、6 足元、7 頭部、8 鞆、9 ネイルの 9 カットである。

引用・参考文献

- 1) 難波知子, 学校制服の文化史, 創元社, 2012 年 2 月, p5-7
- 2) 田中淑江、長谷川紗織、宮武恵子, 現代に見る女子大生の卒業式の袴姿 - 伝統的着装の変化について -, 服飾文化学会誌, Vol. 16, 2016, p 1-15
- 3) 田中淑江、長谷川紗織、大塚絵美子、宮武恵子, 卒業式に見る袴の現代的着装の研究 I: 伝統的な視点から, 共立女子大学紀要, 2015, 第 61 号, p11-47
- 4) 田中淑江、長谷川紗織、大塚絵美子、宮武恵子, 卒業式に見る現代的着装の研究 II: 伝統的な視点から, 共立女子大学 家政学部 紀要, 2016, 第 62 号, p75-87
- 5) 瀬川 かおり、田中 淑江、大塚 絵美子、長谷川 紗織、宮武 恵子, 卒業式に見る袴の現代的着装の研究 I: ファッションの視点から, 共立女子大学紀要, 2015, 第 61 号, p59-73
- 6) 瀬川 かおり、田中 淑江、大塚 絵美子、太田 裕子、長谷川 紗織、宮武 恵子, 卒業式に見る現代的着装の研究 II: ファッションの視点から, 共立女子大学 家政学部 紀要, 2016, 第 62 号, p7-21
- 7) 研究代表者 佐藤 真理子, 袴の機能性研究 -

世界に発信する“HAKAMA is cool”－, 基盤研究(C)2014-2016

8)山下悦子, きもの歳時記, CCC メディアハウス, 1998年, p8,9

9)はかま 主催マイム協賛ハクビ 2015年

10)卒業時装 丸昌 2015年

11)はかま 主催マイム協賛ハクビ 2016年

12)卒業時装 丸昌 2016年

13)卒業袴 ジョイフル恵利 2016年

14)太田 裕子、瀬川 かおり、大塚 絵美子、宮武 恵子、卒業式の袴着装に関する研究(1)－色彩データの視点から－, 服飾文化学会第18回総会, 口頭発表

15)Brent Berlin, Paul Kay, Basic Color Terms: Their Universality and Evolution, University of California Press, 1969

16)RM Boynton, CX Olson, Locating basic colors in the OSA space, Color Research & Application, 1987, Vol. 12, p 94-105

17)RM Boynton, CX Olson, Salience of chromatic basic color terms confirmed by three measures Vision Research, Volume 30, Issue 9, 1990, p1311-1317

18)K. Uchikawa and R. M. Boynton: “Categorical color perception of Japanese observers: Comparison with that of Americans”, Vision Res., 27, 1987, p1825-1833.

19)三宅正夫, 衣服選択のための色情報処理, 大阪大学 博士論文, 2014年

20)石原久代、神谷綾子、加藤千穂, 着装イメージに関与するきものと袴の色彩要因, 名古屋女子大学紀要第54号, 2008, p1-12

21)千々岩英彰, 色彩学概論, 東京大学出版会, 2004年6月, p160-168

22)大井義雄、川崎秀昭, 色彩カラーコーディネーター入門, 日本色研事業株式会社, 2007年, p45, p41

23)藤田恵子, 学生の被服製作における布の色選択と雑誌のトレンドカラー, 東京家政学院大学紀要第49号, 2009, p17-24

24)難波知子, 学校制服の文化史, 創元社, 2012年2月, p173

25)消野恒介、島森功, 配色辞典, 新紀元社, 2006年12月, p18

26)大山正, 色彩心理学入門, 中央公論社 1994年1月, p210